



魔力を授けるタコ

プロローグ

「御休みのところを、も、申し訳ありません、姫様、お、王がお呼びでございます、い、如何いたしましょう」と蒼白な面持ちで侍女のサルスが私の肩を揺らす。恐らくまだ深夜を少し過ぎた頃だと思われたが、私は一瞬で覚醒した。母が死んでから私は、深い眠りを味わう日など全くなくなってしまった。眠りにつけばいつも恐ろしい夢を見る。

「……父上がまた私を」と私は、巨大な禍々しい闇が私の幼い心を捕食していくのを、知覚しながら床から身を起こした。叫び声をあげたいのに出せない。王族としての誇りが邪魔するのか、死んだ母への義務感がそうさせるのか。

「姫様はご気分が優れないと申しあげましょうか」とサルスは青ざめた顔で私に言った。

「……いや、参ると王に告げておくれ」と私は下唇を噛みながら、父上の心に巣くっている**魔物**に激しく憎悪をたぎらせて、闇を睨んでいた。逃げ出したかったが、地上の支配者から逃げおおせる術などない。ただひたすらこれから起るおぞましい時間を思っ、襲い繰る悪寒と吐き気に耐えるばかりだった。

父王の居室に行くと、無人の空間で瞳を閉じて瞑想するように静まる父王の姿があった。彼は私の姿を戸口で確認すると、喜色を示して卓上のグラスに手を伸ばした。

「おお、ソニアすまんな、寝ているところを」と父ルーフル王は葡萄酒の杯を傾けながら、不自然に歪んだ笑みを娘の私に向ける。私はその笑顔を見て、吐き気がしたがなんとかそれを我慢した。

「お前の母が毒殺されてから、わしはいつも恐ろしい夢を見るようになった。今宵も慰めてくれないか、姫よ」と父は赤く血走った目を、私の白い尖った顎に焦点をあてて言った。

「またしても……わ、私を母上の代わりにするの……ですか」と私は震える声で言った。

「また、その目で睨みおる。お前ら母娘は常に、正統なる王位継承者ルスカーフ家の血を誇りわしを蔑んできた」と父王は吐き捨てるようにいって、まるで己が犠牲者か何かのように深いため息をつく。

「わ、私の願いはただ普通に……父親として私に接して頂きたい……そ、それだけなのです」と私は震える声で父王の正気の部分に期待して訴えてみた。しかし、それはいつも空しい。

「黙れ、お前らの古き血がいかに由緒あるとはいえ、実力もない異民族から国も守れぬ輩に玉座の資格はないのじゃ。お前の母はそれを理解できなかった」

「叔父上たちを殺し、は、母さえも殺し、実の娘の私をこうして汚すとは。父王の心は闇に食われてしまったのでしょうか」と叫ぶ私の瞳は、既に涙で視界が見えぬ状態になっていた。

「それほど、玉座というのは孤独で人の心を狂わせるものなのじや。許してくれ……お前の涙で歪む顔と美しい肉体だけがわしを罪の意識から解放してくれる」と父王は私の身体を折れるほどに強く、その逞しい軍人の肉体で抱きしめながら言った。

「……わ、私も母のもとへ送ってください」と私は苦痛で顔を歪めながら懇願した。

「そうすると、栄光あるルスカーフ王家の血が途絶えることになるが、それでもいいのかな」と冷酷な声で言って彼は私の青い絹の着物の袷を当たり前のように開いていく。まだ成人の女性に比べれば脆弱で小ぶりの私の乳房を、父王はその無骨で刀傷だらけの手で乱暴に包み込んだ。

「や、やめて、い、痛い」父王の親指が乳房の薄紅色の先端に触れるたびに悲しい痛みが私を襲った。

「お前の美しさは古い王家の腐った土から生まれた、奇跡の花のようだよ。お前の母が余に残した唯一の宝だ」と目を細めて王が呟く。

「は、早く、こ、殺して、母のもとへ……お、送って」と言っている私は、耳を手で押さえながら王に言った。

「ふふふ、異民族の首を十万も狩ったこのわしじゃ、地獄行きは決まっておる。それにこの程度の小さな罪を重ねても何も変わら

ぬ」と王は私の着物を器用に剥ぎ取り、私を生まれたままの姿にして軽々と抱きかかえた。私の無防備な肉体が天井に向けられて魔物への供物のようにして、厳かに寢所に運ばれていく。

「む、娘を犯すことが小さな罪であると」と私は目を剥いて、父を睨んだ。

「王族であることが既に罪なのじゃ。地上の富と力を独占するということがいかに罪深く恐ろしいことか……それをそなたたちルスカーフ王家の者たちは考えたことがあるかね」と王は哲学者のように呟く。

「わ、私は王族であることを望んだことなどない、このような狂った日々を、誰が欲するか」と私は震える声で魔物に抗議した。そう、それはもはや父は父ではなく、己の欲望を満たすことだけを考える魔物だった。

「ふむ、わしも玉座を望んだことなどなかった。しかし、お前たちルスカーフ家には既に統治能力はなかったのだ、余は国民のため玉座を奪ったのだよ」と王は悲しそうな目で私に告げた。

「な、なんたる傲慢」と私は無駄とは知りながらも魔物に怒鳴った。

「家柄や血統の正当性だけで、国民を守るなら誰でもできるのだ。お前はルスカーフ王家の怠慢を一族になり代わって、贖わなければならぬのだ」

と王は無表情で娘の私にいいながら、その巨大な武人の身体をゆつくりと私の華奢な身体に重ねてくる。不快感で全身に鳥肌がたつを感じる。やがてその不快感は、下半身を襲うすさまじい激痛に取って代わられた。

「や、やめて、い、痛い、父上が、わ、私の中にはいると……」
と私はまた涙で瞳を濡らしながら魔物に懇願したが、

「じきに慣れる、お前も小さいながらも、もはや女」そういつて慈父のような笑みを浮かべて、魔物は私の額にそつと口付けをした。長くておぞましい夜がまた……始まった。

①

「お前は私にどんな快楽をくれるんだい」とタコが言った。

彼女の容姿は三十代後半の女性だったが、その実態は魔法使いに魔力を授ける聖霊であり、何故か人々からタコと呼ばれていた。タコはアルコイというペルギア王国の東の一番高い山に住んでいる。

「我が妹が人としての尊厳を失った話をします。多分それはあなたにとってお好みの快楽でしょう」と俺はタコに言った。妹の悲しみと絶望に満ちた表情が脳裡に浮かんだが、俺はそれをあえて

無視した。俺は身内の不幸話をタコのエサにして、魔力を得ようとしている。何故ならタコの快樂は身内の悲しみの記憶だからである。

「妹の悲しみを売る兄か、月並みなこと」とタコは皮肉っぽい笑顔を向けたが、俺はわざとその視線を反らして空を見上げた。鷹が一匹気持ち良さげに青空を旋回している。

説明を続けるが、魔法使いというのはこの世界では身内にとってもない不幸が起きた人が、たまたま魔術に詳しかったために偶然なれる生業（なりわい）である。

繰り返すが、魔力はタコからしか得られず、タコは身内の不幸話を聞くことでしか快樂を得られない。快樂を得られないとタコは一欠けらの魔力も恵んでくれない。

いったいタコが善的存在なのか、魔物よりの存在なのか誰も分からない。

タコはいつも山にいて身内の不幸話を待ち侘びている。だから魔法使いを志す人間は身内に必ず嫌われる。百パーセント嫌われる。それは魔法使いというものは身内の不幸を期待するヤカラだと思われているからだ。しかし俺の見解ではそれは違う。俺は身内が代々ある種の不幸に見舞われていることを予想し

どうせ身内に不幸が起きる可能性が高いなら、念のために魔法を勉強しておいたほうがいいのではないか

と考えたヤカラである。決して魔力を得るのに身内の不幸を望ん

だわけではない。多分この世で魔法使いになった人間の大部分は、俺のような人間ではないだろうか。しかし世間ではそうは考えず、魔法使いを憎む人間は本当に多い。魔法使いになるとたちまち親からも兄弟姉妹からも口をきいてもらえなくなり、途方にくれて森に孤独に住むようになる。俺もいずれは森か山に住むことになるだろう。

俺はペルギア王家の当主ルーフル王の次男でアギオンという。生まれてすぐの原因不明の高熱で脳か神経がやられて足を引きずって歩くようになってしまった。皮肉にもそのおかげで王位の後継者争いから離脱してしまい、兄弟姉妹とは緊張感のない関係を持つことができた。誰もが俺のことを愛してくれたが、いくらかの悔りを含めた親愛の情だったことは否めない。

そして俺にはソニアという美しい三歳下の妹がいた。彼女は母親が異なる妹であったので王国の掟では結婚も可能な相手であったが、美しい彼女が俺のような負け犬と結婚する可能性は皆無だった。

希望ゼロ

彼女はその美しさと同じくらい尊大で傲慢な少女だった。彼女は幼い時から俺の真似をしてはやたらと王宮の空気を緊張させた。当然足を引きずって歩き、更には白目を剥いてヨダレを流すというオマケまでつけて。ちなみに俺は人前でヨダレを流したことは

一度もない。彼女が俺につけたあだ名は光栄にもペンギンだった。



その美しいソニアの話が今回のタコのご馳走である。俺は緊張しながらもタコに彼女に起きた悲劇を説明しはじめた。

「私の妹ソニアは、隣国サマルドの王の長男ルキオンのもとに嫁いで行きました。本当に美しい娘で、王国の男で彼女に憧れぬ者はおりませんでした」と俺が言うと、タコはグフフと笑った。どうやら若い女性の不幸話はお好みのメニューのようだった。世間の噂で聞いた通り。

「妹が嫁いだとき、両国の平和は三十年目を迎えておりました。誰もが妹は隣国の次代の王の子供を産み、王妃として幸せに生きていくだろうと思っておりました」そこまで言っただけで俺は、言葉を止めた。

「それで幸福はどこから綻んできたのだい？」とタコはヨダレを流しながら欲情している様な、絶望しているような、白痴のよくな顔つきで先を促した。年増女ながらそれなりに美しいタコがそういった奇態な表情を浮かべると結構すさまじかった。俺は背中に冷や汗が浮かぶのを感じる。

「不幸の発端は、両国の国境に新たなクジュナ石の鉱脈が見つかったってしまったことです。それは鉱物の博士たちを驚かす程の埋蔵量でした」

「それで戦争かい」

「もちろん両国は最初のうちは平和な交渉で、互いの取り分を決めようしていたのですが」

「うふふ、そうだろうねえ。最初はそうするものさ」とタコが落ち着いた口調で先を促す。

「しかし、どの国でも手柄にあせる馬鹿はいるものです。先ず我が国の二番目の地位にある将軍が独断で鉱脈のある場所に軍を派遣してしまいました。奴の妻はソニアの腹違いの妹でウルチアという者です」と俺は思わず苦々しい口調で言った。

「なるほどお転婆娘がもう一人いたかい」とタコは上品に口を手で隠してまたグフフと笑った。

「ええ、しかもウルチアは姉のソニアの美貌に嫉妬し、その傲慢

さを憎んでおりました。それ故の軍の派遣でした」

「それは不思議だねえ。いくら王の娘の夫とはいえ、そこまで独断専攻が許されるものかい？」とタコは率直に疑問を口にした。

「王がお元気であればウルチアと將軍の首は即刻飛んでいたことでしょう。しかし、ソニアの父親のルーフル王は八十という高齢からくる老衰で紛争が起きた時には病没しておりました」と俺はソニアの不運に心を痛めながら言った。

「なるほどそういう話かい」謎々が解けた童女のように無邪気にタコが満面の笑顔を浮かべていた。

「そのため当時外交を指導していたのは長男のエスピシオでした。そしてエスピシオは昔ソニアに求愛して、手酷く振られておりました。つまりソニアの敵は少なくなかったのです」と俺は慎重に言葉を選びながらタコに悲劇の背景の説明を続けた。

ソニアの母親は、兄弟姉妹の母親たちの中では最も有力な貴族の娘で、彼女はソニア一人を産んで若くして死んだ。多数の妻たちの中で、ソニアの母を最も愛していたルーフル王は彼女の唯一の娘であるソニアを子供たちの中で最も溺愛していた。ソニアがつけ上がるのも無理がないというものだ。最高の血統、最高の美貌、父王の愛を一人で独占してきたのだから。

「では兄であるエスピシオは妹のソニアを見殺しにしたということかね」とタコは何故か目を閉じて言った。

「そういうことになりますか」と俺は兄王を非難せぬように曖昧な返答をした。自分の小心さに呆れながらも。

「しかし、たかが女に昔振られたことの意趣返しに、重要な隣国との友好関係まで台なしにするとはねえ」と、タコは兄をさも軽蔑するように皮肉っぽい顔つきで言った。彼女の感想は正しい。

「兄には確実な勝算があったのです。確かに隣国サマルドは以前こそ優秀な騎兵と長弓兵を誇り、有数の強国でした。が、今は世交代が進み平和に倦み、その軍隊の水準もどんどん落ちていったのです」

「なるほど、隣国の弱体を狙うのは戦国の常と……」

「そういうことです。逆に兄は長い年月をかけて、自国の軍隊の弱点を改革して、圧倒的な軍の質の向上をはかっていたのです」

「ふん、退屈な話だねえ。結論をいいな。ソニアはどうなった」と今にも寝込みそうなほどの大袈裟な欠伸をしてタコが言った。

「妹は我が国の裏切りに怒った王子ルキオンの命令で両腕両足を切り取られて水槽に鑑賞の花のように美しく活けられて件の国境に放置されているのを兵に発見されました。その絹のように美しい肌を隠す衣類はなく、多くの兵士に奇妙な白い置物として隅々を見られたとのこと。そして彼女は帰国してからは自室に閉じこもり死んだ人間のように人目を避けて生きております」

「おほほほほほほほ、お前の話は凄まじい快樂をくれたよ。お前は大魔法使いになれるぞ。妹を死なせるなよ」

とタコが目を剥いて叫んだのを俺は身震いしながら聞いていた。
そうやって、ただのペンギンだった俺は魔法使いの第一歩を踏ん
だ。実の妹の悲劇を踏み台にして。